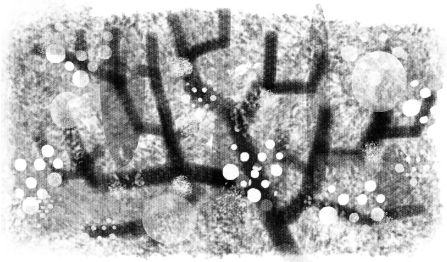

淳風集

小林貴子

避暑名残踝に風立ちやすし

水際に来てゐる鹿や森晩夏

薪能狐が刀淬(にら)ぐ所作

悲しみの淵とはいづこ天の川

手を差せば水に水影蓼の花

戸口の笊は海士の符牒や韮の花

空海に運ぶ朝餉や秋風裡

新涼の腕を翼開きかな

晩禱やかなかなの声風に乗り

月照らす時の静けさドビュッシー

立ちつづけ仏となる木小望月

人類消滅アイスクリーム溶けてゐる

俳句弾々(とんとん)

小林 貴子

二〇一六年、第十六回「現代俳句大賞」を俳文学者の堀切実先生が受賞された。芭蕉の打ち立てた蕉風俳諧の理論を主な研究テーマとされ、それに関する著書ももちろん多いが、『最短詩型表現史の構想――発句から俳句へ』(二〇一三年岩波書店)においては芭蕉の「俳諧」が幕末を経て正岡子規らの手によっていかに変革され「俳句」となったかを考察された。それに続き出された『現代俳句にいきる芭蕉――虚子・波郷から兜太・重信まで』(二〇一五年ぺりかん社)は、副題を見て分るとおり、さらに現代俳句を考察の対象としている。本書の中で私が最も興味を惹かれたのは次の部分だ。

文法学者の山田孝雄は日本語の中で一語で呼び掛ける文章を「喚体の呼格」と呼んだ。暑い時に水が欲しくて「水!」と叫ぶような場合だ。一方、俳人の秋元不死男は「俳句もの説」を著し、俳句はモノを表現すべしと論じた。ところが、山田説を敷衍した森重敏は、俳句は「モノ」を提示するが、時に一句全体が「喚体」になると解き、それは、文としては「コト」表現へと転化しているのだと説く。その論は南方熊楠が創案した学問の一つの「事の学」と一致する。……と堀切論は展開する。縦横に時空を駆ける論考に接し、改めて俳句の素晴らしさ、奥深さに浸る。先月号の本欄の「かり留め」、過去の「き」の文法問題に触れられているのも貴重。